

令和元年6月26日現在

機関番号：44309

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16249

研究課題名(和文) 認知症高齢者グループホームにおける居住者間の相互作用に着目した環境デザイン

研究課題名(英文) Environmental design focusing on the interactions among residents in a group home for the elderly with dementia

研究代表者

北 順子(宮野順子)(KITA /MIYANO, Junko)

京都光華女子大学短期大学部・その他部局等・講師

研究者番号：30733711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、認知症高齢者グループホームにおける居住者間の相互作用に着目し、人的環境と物理的環境の双方を捉える包括的な環境デザインのあり方を探った。認知症高齢者グループホームのスタッフに対する質問紙調査では、人間関係を考慮した席配置や少人数テーブルの設置など、介護者が人的環境を良好にするための物理的環境を整えている実態と課題が把握できた。認知症高齢者を含むグループリビングの調査では、運営者や居住者同士の些細な支援が得られる人的環境が認知症高齢者の生活を支えている実態と課題を把握できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症高齢者の生活環境(人的・物理的)において、介護者が果たす役割は大きい。本研究では、設計段階で反映できていない細やかな物理的環境、あるいは人的環境を良好にするための物理的環境を介護者が担っていることが明らかになった。現在のグループホームの環境デザインにおいて、これらが設計段階で考慮されていることは稀である。制度基準遵守に留まらない介護者や高齢者の声を反映した設計指針へと展開できる点で学術的意義および社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this research, we focused on the interaction between residents at a group home for the elderly with dementia in pursuit of a comprehensive environmental design that captures both the human and physical environments. Through our questionnaire surveys for staff at the group home for the elderly with dementia, we were able to determine the current status and issues surrounding how caregivers maintain the physical environment to in turn create a better human environment, including setting up seating arrangements that take human relations into account as well as table arrangements for small groups. Through a group living survey involving elderly individuals with dementia, we were also able to determine the current status and issues regarding support for the daily life of elderly individuals with dementia offered by a human environment that makes minor forms of support from the operators and other residents possible.

研究分野：高齢者の居住

キーワード：認知症高齢者 認知症高齢者グループホーム 高齢者グループリビング

1. 研究開始当初の背景

執筆者はこれまで自立高齢者を対象としたグループリビングの研究を行ってきた。（科研費 2014-2015 奨励研究）グループリビングは自立高齢者を対象として、3-10 人程度の規模の共同居住を営む制度外の住まい方である。小規模処遇のケアの場として捉えられることもある。

（三浦 2000、2001）グループリビングにおける研究を通じて、小集団で生活の重なりがあるという状況から、揉め事・衝突が発生し、これを通して、居住者間の相互理解や緊張感・競争心が生まれ、その効果として、自尊感情・被受容感の形成、ひとりではできない生活の楽しみ、相互扶助、知的発達、生活のリズム・健康の維持などの生活の質の向上が図られていたことを明らかにした。また、長期間の居住を営むなかで、居住者は認知症を発症するも、居住者のあいだで自らの役割を見出し、居住継続ができていた。

上述の研究は自立高齢者を対象に行われてきたが、所属研究機関における認知症介護者研修等の傍聴を通じて、認知症高齢者グループホームにおける共通点と相違点に着目した。認知症高齢者グループホームは、介護保険法に規定される介護を目的とする施設であり住宅とは異なるとされる。しかし、家庭的な小規模処遇がその特徴とされ、共同生活を送ることで、認知症の進行を遅らせることが期待されている。認知症高齢者においても、居住者間の相互理解や競争心などが見られ、これをうまく利用することで、認知症の進行を遅らせたり、居住者の生活の質を向上させることが期待できる。

2. 研究の目的

認知症高齢者グループホームにおける居住者間の相互作用に着目し、環境デザインのあり方を明らかにするものである。

3. 研究の方法

本研究では、目的を達成するために2つの方法を採用した。

(1) 認知症高齢者グループホームにおける居住者間関係の把握

認知症高齢者にとっての生活環境を整える上で、介護保険事業所で介護にあたる職員が捉えている課題や良いところ、改善するための工夫を抽出し、建築計画的課題を明らかにするために、認知症介護実践研修の受講者に対し、自らの所属する施設・事業所における生活環境における課題およびその対策、行っている工夫について、自由記述方式の質問紙調査を行った。

(2). 高齢者グループリビングにおける居住者間関係との把握

① 高齢者グループリビング(北海道北見市)の事例調査

2009年に国土交通省高齢者住まい安定化モデル事業に採択された、北海道北見市にある事例を研究対象とした事例調査である。基礎資料収集を行ったのち、居住者の生活の様子を把握している運営者に現地にて、聞き取り調査を行い、運営や居住者の変遷、生活の様子を把握した。

② 高齢者グループリビング(大阪市旭区)の事例調査

大阪市旭区にある事例を研究対象とした事例調査である。基礎資料収集を行ったのち、居住者の生活の様子を把握している運営者に現地にて、聞き取り調査を行い、運営や居住者の変遷、生活の様子を把握した。なお、ここでは併設されている賃貸住宅が当初、学生向けとして運用されていたものの、徐々に障がい者、生活保護受給者を受け入れ、福祉マンションと

して運用されている。同一の運営者であり、高齢者グループリビングとの連携が進んでいるため、併せて調査を行った。

4. 研究成果

(1) 認知症高齢者グループホームにおける居住者間関係の把握

239 人の受講者から総数 1364 のデータを得て、これを分析した。事業者の方針や利用者の ADL 等の状況により相反する意見や、建築計画における課題をものの工夫や人的介助で補う構図が明らかになった。

特に、人的環境のなかでも、利用者同士の関係は制御が困難である。トラブルを回避するよう配慮している様子が伺え、人間関係を考慮した席配置については多くの意見が集まった。効率のよい 6 人用テーブルを設置することが一般的であるが、4 名用、2 名用のテーブルを設置することで、相性の悪い人を避けた席配置が容易になるという工夫がみられた。

(2) 自立高齢者グループリビングにおける居住者間関係との比較

① 自立高齢者グループリビング(北海道北見市)の事例調査

施設ではない自由な暮らしを希求する居住者が自己選択の上居住し、些細な支援を運営者などから得ながら、自分らしい暮らしを継続している高齢者共同居住の様子が伺えた。2010 年 10 月に運営開始した 4 階建、24 戸(居室専用面積は 11.62 m²)の事例である。専用設備は、洗面・トイレ・ミニキッチン・浴室・収納である。共用設備として、食堂、厨房、浴室、トイレ、地域交流スペースとなっている。

これまでの居住者はのべ 18 人(男性 8 人女性 10 人)、入居時の平均年齢は 77.6 歳である。2012 年春ごろより 9~10 室稼働している。単身世帯が大半を占めるが、夫婦世帯も 2 世帯(1 世帯はその後、夫死亡、単身世帯となる)存在する。要介護度は、自立 9 人、要支援 3 人、要介護 1 2 人、要介護 2 3 人、要介護 3 1 人である。要介護認定を受けず、自立している人が多いが、認知症とみられる居住者も 4 人含まれている。平均要介護度は 0.5~1 を推移している。平均居住期間は 2 年 5 ヶ月ではある。認知症とみられる居住者や要介護 2 の居住者も含まれている。運営者は高齢者介護の専門職ではないながらも、認知症の対応を習得するなどしながら、居住者の生活と居住者間関係形成を支援し、居住者との信頼関係を醸成していた。

② 高齢者グループリビング(大阪市旭区)の事例調査

2004 年から運営される高齢者グループリビングである。より緊密な関係を好む場合はグループリビングの個室を、一定の距離感を保ちたい場合は、上階の賃貸住宅を選択し、居住者の対人関係の距離感により選択し、ときに状態に合わせて変更しながら、高齢者の居住を支えていることが確認された。長期間の居住において、認知症症状が進んでいくので、居住者間でも相互の変化を認識する。認知症状の重軽に依らず、共同居住生活より長期間の居住者を尊重されている側面が見受けられた。

この住まいは、近隣火災の影響を受け、2011 年に現地に移転している。開設当初は個室の独立性の高い平面であったが、それまでの居住者の様子から、個室の独立性よりも人の気配が身近に感じられる開放性の高い平面へと変化させた。これは、長期間にわたる共同生活において居住者間に一定の信頼関係が醸成された後、寝たきり状態となった認知症高齢者にとって、人の気配が重要であるとの、運営者の判断によるものである。

① ②の調査を通じて、目的とは異なる課題があきらかになった。

① では、介護施設ではないため、その支援は完全ではなく、行方不明や過度のアルコール摂取を規制できないなど、ときに居住者の生命の安全を脅かす出来事も見受けられた。高齢者の共同居住を住宅運営者が担っていく際に、議論しておかなければならない論点が明らかになった。

現在の行政指導では、食事提供がある高齢者の共同居住形態では有料老人ホーム等の登録が求められている。その際、状況に応じては、運営者には入居者に対する安全配慮義務が課されることとなり、外出や飲酒といった生活面での制約をせざるを得ない局面も考えられる。認知症の有無を問わず、高齢者の自己決定による自由な暮らしを尊重し、その中の選択肢として、食事を共にするグループリビングが存在するためには、いきいきとした在宅生活とはなにか、またその代償とは何かについて、社会的に議論し共有していく必要を痛感した。

② では、居住者のプライバシーを尊重し、これまで個室化を進めてきた高齢者の住まいにおいて、発想し得なかった視点が見出された。重度化した認知症高齢者のQOLについては、長年の介護者の直感的な領域を超えて科学的な評価をすることが難しい領域である。

(2)自立高齢者グループリビングにおける居住者間関係については、本研究により新しい視点が得られたため、次の課題へ継続予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 4 件)

(1)宮野 順子:The reality and signification of Access audit based on user participation A study through "Check & Advise System" in Hyogo Prefecture, Japan, 第6回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2016in 名古屋, 2017年5月, 査読あり

(2)宮野 順子, 絹川 麻理, 高田 光雄:小規模多機能型居宅介護サービスと連携する 高齢者の共同居住住宅の運営実態 - 兵庫県相生市 M の家の居住者履歴を通して-, 日本建築学会 第11回 住宅系研究報告会論文集, 2016年12月, 査読あり

(3)宮野 順子:QUALITY OF LIFE RESULTING FROM THE RELATIONSHIP BETWEEN RESIDENTS IN ELDERLY GROUP LIVING -A study through management history of 'GROUP HOUSE SAKURA', Proceedings of the 11th ISAIA, pp. 454-459, 2016年9月, 査読あり

(4)宮野 順子:住宅会議 99(担当:分担執筆, 範囲:高齢者が「生活を楽しむ」基盤としての共同居住), 日本住宅会議, 2017年2月

[学会発表] (計 4 件)

(1)宮野 順子:高齢者グループリビングの運営実態 - 北海道北見市にある「じゅげむ館きたみ」の居住者履歴を通して -, 2017年度日本建築学会大会(中国), 2017年8月31日

(2)宮野 順子:認知症高齢者が生活する介護保険事業所の建築計画的課題と職員の工夫 -認知症介護実践研修受講者に対する生活環境についてのアンケートより-, 日本福祉のまちづくり学会第 20 回記念全国大会 in 東海 2017 年 8 月 9 日

(3)宮野 順子:介護保険施設・事業所における生活環境構築のための課題と工夫 認知症介護実践研修受講者に対する自由記述回答の分析, 日本老年社会科学会第 59 回大会 2017 年 6 月 14 日

(4)宮野 順子:軽度認知障害を患う人のためにできる環境改善の小さなアイデア, 第 32 回国際アルツハイマー病協会国際会議 2017 年 4 月 27 日

[その他]

ホームページ等

特になし

6. 研究組織

(1)研究分担者

特になし

(2)研究協力者

特になし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。